ぎのわんの歴史・文化遺産を歩く 其の19

「各地域の文化財①」

はじめに

今月は、宜野湾市内の各地域が大事にしている指定・登録文化財について紹介します。最初は、平成26年8月15日に登録文化財となった「字宜野湾の年中祭祀」です。

集落が基地となっても

「字宜野湾の年中祭祀」は、戦前から字宜野湾の方々が行っていた祭祀の一部で、土帝君（トゥーティークー）の例祭、カーサレー拝み、シマクサラシがあります。元の集落が普天間飛行場に接収されてからも、現在の宜野湾区を中心に行っている祭祀です。

土帝君例祭

旧暦2月2日に、宜野湾公民館近くの土帝君祠（ほこら）で行われる祭祀です。字宜野湾の土帝君は、中国から勧請（かんじょう）したとされ琉球の歴史書「球陽（きゅうよう）」にもその記述がみられます。字宜野湾では、土帝君はチュクイ・ムジュクイ（農作物）の神、ムラの守り神として篤く信仰されています。

カーサレー拝み

旧暦6月25日に行われる行事です。現在は、旧暦以降の日曜日にウブガーなどを清掃した後に、ウブガーやメーヌウタキ、クシヌウタキなどで祈願を行っています。

シマクサラシ

旧暦8月10日に区内に悪疫（あくえき）が侵入するのを防ぐためシマクサラシと呼ばれる祈願があります。字宜野湾は、集落が接収された現在は、宜野湾区の所定の場所で、ビンシー（洗い米・酒・塩等）と重箱（牛肉等）を供え、招福除災（しょうふくじょさい）を祈願しています。

問合せ：文化課 ☎893-4430

土帝君例祭

カーサレー拝み

シマクサラシ

茶ぐぁーゆんたく 133

身近な自然に目を向けてみよう！

メーテルリンクの『青い鳥』のお話をご存知ですか。二人の幼い兄弟が青い鳥（幸せの象徴）を探して旅に出ますが、実は青い鳥は自分たちの家にいた、というお話で、足元を見つめる事の大切さを気づかせてくれます。

さて、私たちの身近なところに目を向けてみると、宜野湾市にも青い色の鳥がいます。「イソヒヨドリ」（方言名イシズーサー）のオスで、ハトより小さく、スズメより大きい、全長約25センチです。頭から胸、背、腰が青藍色（コバルトブルー）、腹は暗赤色です。青い色は光の当たり具合でさらに鮮やかに見えます。

「ヒヨドリ」と名前についていますが、実はツグミ科の鳥で、メスは上面が灰黒褐色、下面が暗黄褐色で、オスに比べてかなり地味です。

イソヒヨドリのオス
市水道局前　2015（平成27）年3月

元々の習性は、海岸線の岩場を生息地としていたようですが、宜野湾市では内陸部も含め市内全域で見られる留鳥（渡りをせず、一年中住み着いている鳥）です。主に昆虫類を捕食し、高い澄んだ声でさえずります。

1995（平成7）年の調査により市内で確認された鳥類は、35科118種でした。そのなかで、留鳥は26種で全体の約22％に留まり、約78％は季節の移動中に立ち寄る、夏鳥・冬鳥・旅鳥でした。これは市内の緑地や河川、水田などを頼りに渡り鳥がやってきていることを意味しています。現在は、宇地泊干潟が埋め立てられ、また、都市化などの大きな環境変化が野鳥たちの数を減少させています。

緑地は私たちに潤いをもたらしてくれると同時に、野鳥にとっては採餌（さいじ）、休息、繁殖などの重要な場所となっています。野鳥の生態を知り、その環境を保全することは、人間にとっても住みよい暮らしを築くことになります。

豊かな未来のためにも、一人一人が自分のまわり（足元）の自然に目を向け、今ある自然環境を守ることが大切ではないでしょうか。

『宜野湾市史』への問合せ
市立博物館 ☎870-9317